

佳作

夢に向かって

福島県郡山市立郡山第一中学校

1年 阿久津 優言

ぼくの将来の夢は、医者になることです。ぼくは、未熟児で生まれたせいか体が弱くてすぐに熱を出したり、周期性嘔吐障害になったりして、小さい頃から点滴をしてもらっていました。幼稚園の頃は、急性中耳炎で高熱が出て、入院までしてしまいました。そんなぼくのことをいつも温かく治療してくれたのが、トータルヘルスクリニックの繁文先生です。繁文先生のことをぼくは、繁先生と呼んでいます。赤ちゃんの頃から通っているので、繁先生もぼくのことをまこちゃんと呼んでいます。

繁先生が、いつも患者さんと目線を合わせ、ていねいに話を聞いてくれるので、安心して何でも困っていることを相談することができます。病状を伝えると、いよいよ診察が始まります。聴診器を手でゆっくりと温めてから体の状態を診てくれます。繁先生のまほうの手で診察されると、それだけで具合が良くなったような気がするのがいつも不思議です。可能性がある病気に効く薬が処方されますが、いつも繁先生は、

「つらくなったら我慢しないで連絡してくださいね。病院がお休みでも、病棟から入って点滴をしますからね。」

と、温かい言葉をかけてくれます。

繁先生は、患者さんに「治療しましょう」ではなく、「お手伝いします」という言葉を使います。患者さんの気持ちのケアを一番に考え、どんな訴えも100パーセント受け入れるよう努力して、苦痛や不安を分かち合う診察を大切にしたいと思っているからだそうです。患者さん一人ひとりに寄り添って診察をしているそんな繁先生の姿に小さい頃からあこがれています。

繁先生の診察室の壁には、毎月の努力目標が飾ってあります。その言葉の中で、ぼくが一番心に残っているのは「患者さんの痛みが分かる医者でありたい」という言葉です。患者さんの気持ちに寄り添ってお手伝いをしたいという繁先生の優しさが伝わり、ぼくの心は温かくなりました。

ぼくは、4月から中学生になりました。小学校の頃は、授業をしっかりと聞いていれば学習内容が分かり、テストはだいたい点数が取れました。しかし、中学校になると、授業中にしっかりと話を聞いていても、定期テストや新教研では、難しい問題もあって、なかなか思うような点数を取ることができませんでした。どんな勉強をしたら、もっと理想の点数が取れるのだろうか悩んでしまいま

した。それで、夏休みは夏期講習に参加しました。周りの友達も夢に向かって頑張っているのも、とてもいい刺激になりました。お兄ちゃんや家族に勉強の仕方を教えてもらい、この夏休みは、初心に戻り、もう一度学び直しをすることにしました。分かる喜びが感じられるまで、必死に勉強することにしました。難しい問題も自らチャレンジ。できるまで、考える。

人の何倍も努力しなければいけないということに気が付いたので、しっかりと計画を立てて、高い目標を持ち頑張ります。

中学校に入って、部活は大好きなバレーボール部に入部しました。二人のお兄ちゃんと同じバレー部です。二人のお兄ちゃんは、勉強も部活も手を抜かず目標に向かって頑張っていたので、ぼくにとってよいお手本になっています。お兄ちゃんたちのように、文武両道を目指し、自分の夢に向かって努力したいです。部活でも、レギュラーになれるように、レシーブやトス、そしてサーブ、どれをとっても一番を目指して頑張ります。

ぼくが医者になることをだれよりも楽しみにしていた祖父。ぼくが夢をかなえる前に、亡くなってしまいました。今年は、祖父の七回忌です。祖父は、ぼくが習字で書いた文字を気に入っていました。年長から習字を習っていますが、祖父が大切にしていた習字道具を使っています。ぼくが、祖父のことを思い、必死で練習した小学校1年生の書き初めでは、書き初め大賞を取ることができました。あまりにびっくりして、腰を抜かしてしまうほどでした。やればできるということを実感した出来事でした。

祖父のお墓に刻まれている「心」という字は、2番目のお兄さんが心を込めて書いて、石屋さんが彫ってくれたものです。祖父が亡くなっても家族みんなの「心」は、ずっとつながっているように。いつでも祖父が、ぼくたち家族の「心」の中で生きていられるように。どんな時も、強い「心」を持って、夢に向かって頑張っていけるように。そんなたくさんの想いがこもった字です。ぼくは、医者になるという夢をかなえるために、日々勉強に部活に励みたいと思います。夢に向かって頑張ることが、今まで支えてくれた祖父への恩返しになると信じて。夢に向かって……。